書評　モンテフィオーリ『スターリン――赤い皇帝と廷臣たち』

スターリンとその時代については、既に確立したステレオタイプがある。極悪非道の独裁者と彼を取り巻く権力者たちによる暴虐の数々――「人民の敵」狩りという名の恐怖政治、大量の餓死を招いた飢饉、「通敵分子」となることが恐れられた一連の民族の強制追放、拙劣な戦争指導による大規模な損失、国際政治における権謀術数等々――については、これまでにも多くのことが語られてきた。

こうした現象が起きたということ自体は、誰一人知らぬもののない事実だが、問題はその解釈にある。歴史家たちはその原因、波及効果、歴史的意味等について種々の考察を積み重ねてきた。背景としての客観的要因や、ソ連国内と国外の双方にわたる当時の人々の受容についての検討が重ねられ、ステレオタイプの脱構築ともいうべき作業がなされてきたし、今後もその作業は続けられるだろう。

これに対し、ここに取り上げるモンテフィオーリの著作の性格は、そうした歴史研究とはおよそ異質である。そこに描き出されるのは、ひたすらおどろおどろしい権力者たちの乱痴気騒ぎの毒々しい像であり、それによって既成のステレオタイプを強めようとするものである。全体を通じて繰り返し強調されるのは、ほぼ全員が底なしの酒飲みであり、歯止めない性的乱行にふけっていたということである。一言で言って、このような内容は芸能週刊誌のゴシップ記事というにふさわしい。

それでいながら、本書には大量の参考文献（非公刊の公文書や関係者の遺族たちへの聴き取りを含む）が挙げられ、百頁以上の注を付けることで、あたかも歴史研究書であるかの体裁をとっている。訳者あとがきには、「ソ連の崩壊後に公開された各地各種の公文書館を渉猟して発掘した新資料に基づいて書かれたこと」が本書の最大の特色だとある。

こけおどしの外見に幻惑されずに本書を読むなら、これが誇大宣伝だということは明らかである。政治史上の重要なテーマ（キーロフ暗殺、大テロル、独ソ戦、戦時中の大国間の駆け引き、スターリン晩年の権力闘争等）の大筋は、ほとんどが二次文献――しかもその多くはソ連解体以前のもの――に依拠して組み立てられている。量的には多数にのぼる一次資料類は、いわば「飾り」として利用されているに過ぎない。しかも、あちこちに初歩的な誤りが存在する（一九三〇年一月の有名な富農撲滅指令の三分類の内容説明は完全に間違っている。日ソ中立条約が「不可侵条約」と記されている。強制収容所と被追放者の特別居住区の基本的区別もなされていない。スターリン晩年にあったとされるユダヤ人大量追放構想の噂は、近年の研究では根拠がないことが明らかにされている等）。

かつて評者は、本書と同じく文学者によって書かれた書物（亀山郁夫『大審問官スターリン』）の書評で、次のように書いた。「スターリンやその取り巻きたちをひたすら邪悪で、残忍で、知的に低水準な人間として描き出すのは、真の意味での恐ろしさを描くことにならない。アネクドートの類にはそうしたものが少なくないが、それはどことなく、赤提灯で上司の悪口を言って鬱

憤を晴らすサラリーマンに似ている。そうしたものも当事者によって語られるときにはそれなりの切実さをもっており、安易に笑い飛ばすべきではないが、第三者がそれをそのまま担ぎまわるのは、それこそ安直だと思われてならない。……個人としてのスターリンを邪悪な人間として描けば描くほど、ソ連の歴史はギリシャ悲劇的な荘重さから離れ、ちゃちなホラー映画のようなものへと矮小化してしまいかねない」（『ロシア語ロシア文学研究』三九号、二〇〇七年）。

本書にもこれと同様の批評が当てはまるが、本書の場合、亀山のような豊かな文学的感性を欠いている一方、あたかも歴史書であるかに見える羊頭狗肉が亀山以上に甚だしい点で、その流す害毒は一層大きい。日本を代表する「硬派」の出版社から、このような本が刊行されたという事実を悲しまないわけにはいかない。